



TITLE:

東南アジア社会の歴史的発展の研究

AUTHOR(S):

辛島, 昇; 山崎, 元一; 栗屋, 利江; 田辺, 明生

CITATION:

辛島, 昇 ...[et al]. 東南アジア社会の歴史的発展の研究. 重点領域研究総合的地域研究成果報告書シリーズ: 総合的地域研究の手法確立: 世界と地域の共存のパラダイムを求めて 1996, 20: 125-131

ISSUE DATE:

1996-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/187584>

RIGHT:

東南アジア社会の歴史的発展の研究

1. 研究組織

研究代表者：辛島 昇（大正大学文学部・教授）

研究分担者：山崎 元一（国学院大学文学部・教授）

栗屋 利江（東京大学文学部・助手）

田辺 明生（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・助手）

2. 研究のねらい・目的

研究代表者はこれまでにインド文化の形成とその東南アジアへの伝播についての研究を行ってきた。その過程で痛切に感じたのは、東南アジアに伝播するインド文化が、そもそもどのようにして形成され、その内のどの要素が、どのようにして伝えられたのかという、インド側の事情を明かにしないと、東南アジアにおけるインド文化受容の意味がはっきりしてこないということであった。したがって、本研究においては、地理的にも、言語民族的にも、幾つかに分かれるインド亜大陸において「インド」文化が形成された過程と、亜大陸のどの地方から、どのような事情の下に、何が東南アジアへと伝えられていったのかを明かにすることを目的とした。

おおよその見通しとすると、北インドで形成されたバラモン文化、仏教文化がまず東インド、南インドに伝播し、その過程で「インド」文化が形成されると同時に、それがさらにその先で東南アジアへと伝わっていったことが、その間の歴史的背景とともに多少でも明かになることが期待されていた。この研究を遂行する4名の研究者に共通する認識は、そのように一つの文化が北インドの地から亜大陸の他の地に伝わって、そこで新しいものが生みだされ、それがさらに東南アジアへと伝わっていったという、いわば二段構えの文化伝播の構造である。ルートとしては、東部のベンガル・オリッサ地方、東南海岸部のアーンドラ・タミル地方、そして、西部海岸部のマラバル地方の三つが考えられ、したがって、その地方の歴史の検討も大きな課題となる。

3. 平成7年度の研究経過

研究代表者・辛島と研究分担者・田辺が年度の後半に日本を離れたこともあって、研究会を行ったのは8月24日・25日両日の一回のみであったが、そのときには来日中の元カリカット大学（南インド、マラバル地方）の歴史学科主任M・G・S・ナーラーヤナン教授を招いて、

全員で包括的な議論ができ、またマラバール地方の重要性につき認識を深めることができた。

すなわち、辛島は1990年から95年にかけて行った、東南アジアにおける古代・中世インド関係遺跡・遺物の調査（科学研究費・海外学術調査）を踏まえて、前述の3ルートを通しての伝播が見られることを報告し、また、中でもタミル商人の活動がインド文化の伝播に大きな役割を果たしたことを明かにした。

山崎はこれまで古代北インドで成立したヒンドゥー法典、仏典を基に、古代インドの王権の在り方を明かにしてきたが、今回はとくに有名な叙事詩『ラーマーヤナ』を取り上げ、そこに見られる王権論について報告した。インドにおける王権の問題は、東南アジアにおける国家形成が、インド文化の受容とどう関係するのかを検討する際に、極めて重要なポイントとなるものである。山崎はまた、実際の歴史過程の究明にとって、碑文、貨幣、彫刻などを研究に用いることの重要性をも力説した。

栗屋は北インドのバラモン文化が南インドに伝播して新しいものが創りだされる一つの例として、マラバール海岸地方におけるナンブーディリ・バラモンの社会を取り上げて、そこにおける南インドの風習との結合や、その社会が歴史的にどのような変遷をたどったかについて報告した。今回の報告は、重点が近代におけるナンブーディリ・バラモン社会の変容におかれたが、この報告によってカースト間の問題に焦点が当てられたことは、後述するように、スリランカを含めた東南アジアにおけるインド文化の受容研究に、一つの大きな論点を与えるものである。

田辺は東インドのオリッサ地方におけるバラモン文化の浸透と地方王権の問題を取り上げて、自らのフィールド調査のデータを基に、宗教的権威、政治権力、民衆の三者の関係をいかに構造的に理解するか点について報告した。これはまさにバラモン教、仏教が東南アジアに伝えられたときに起こったであろう種々の問題に、大きな示唆を与えるものであり、民衆の編成原理としてのカーストや部族の問題をも含めて、活発な議論が展開された。

ナーラーヤナンは以上の報告（基本的に英語でなされた）に対して、いろいろと有益なコメントを加えたが、さらに、自らがその歴史研究者（第一人者）として、マラバール地方とその社会が東西貿易に果たした役割について報告し、とくにそれをペルマール朝統治下の状況を例にとって解説した。それを受けて、また、上述の栗屋報告とも関連して、マラバールとスリランカの関係について議論が沸騰した。辛島はとくに、マラバールとの関係を除いても、インド文化の東南アジアへの伝播に際して、スリランカの果たした役割が重要であることを力説した。その結果、上記の3地域に加えて、スリランカを検討の対象とすることの重要性については、

全員の意見の一致を見た。つまり、広い意味での「インド」文化の一つの形がスリランカで形成され、それがミャンマー・マレー半島経由で東南アジアに伝えられていったことの重要性である。スリランカにおける文化の重合性、すなわち、アーリヤ的なものとドラヴィダ的なものとの結合関係についても、活発な議論が行われた。



〔写真1〕 タミル商人ギルドの活動を記すこのタミル語刻文は、スリランカ中部のブドゥムッタワにあるラージャマハーヴィハーラ（仏教）寺院の菩提樹の近くで発見されたが、近年、新しく建てられた建物の壁にはめ込まれてしまった。写真は、拓本採取の作業を見るパドゥマナーダン教授（左端）と代表研究者（右端）

以上は、八月の研究会の状況であるが、その後は、そこでの討論を踏まえて、個々の研究者がそれぞれの研究を推進した。山崎・栗屋は、国内で「日本南アジア学会」第8回全国大会（広島大学）に参加して、他の研究者と討論するなどして、論点を明確にする作業をも行ったが、辛島は、国際交流基金の派遣によりスリランカのコロombo大学で教鞭をとる機会に恵まれたので、ペラデニヤ大学のパドマナーダン教授と協力してタミル商人ギルドの活動についての研究を推進し〔写真1〕、また、スリランカと東南アジアとの関係について、ケラニヤ大学のリヤナガマゲ教授の教をうけたりした。田辺は、日本学術振興会からの派遣によりデリー大学に赴き、さらにオリッサ地方でのフィールド・ワークを行っている。中世における民衆レベルでの動きについて、伝承その他の史料を収集しつつある。

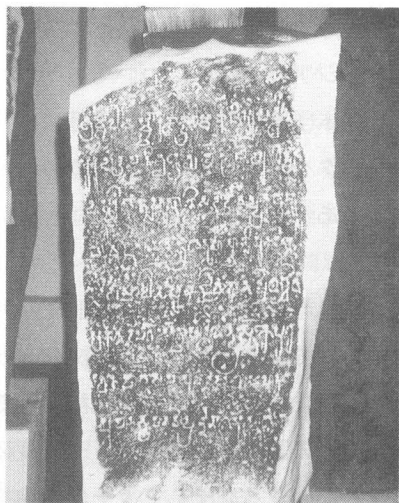
4. 研究の成果とフロンティア

上述したように、初めの予想として、古代の北インドで成立したバラモン文化、仏教文化が、その後インド亜大陸内部の他の地域に伝播して行き、そこで新しい文化が発展し、それがまた東南アジアへ伝えられて行くという、いわば、二段構えの論法の妥当性は、今年度の研究会その他の機会に行った議論によってほぼ確かめられたといえる。そして、その議論を通して明らかになってきた問題点はつぎのようである。

まず第一に、古代の北インドで成立したバラモン文化、仏教文化が、その後インド亜大陸内部の他の地域に伝播して行き、そこで新しい文化が発展する場合、どこまでが「インド」文化

とどういうか、つまり、個別的な地方文化と全体としての「インド」文化の関係を明確にしなければいけないという点である。これは「インド」文化そのものの理解に大変重要であると同時に、これを明確にしないと、東南アジアに伝えられたものが、汎インド的な「インド」文化なのか、インド的「地方」文化なのか分らず、そこから東南アジア「インド化」の議論に混乱が起こることが予想されるからである。

第二には、上述の点とも関連して、バラモン教の発展した形としてのヒンドゥー教と仏教の関係について明らかにする必要がある点である。すなわち、東南アジア各地には、仏教遺跡とならんで、ヒンドゥー教の遺跡も数多く残り、仏教、ヒンドゥー教の信仰が、王朝によって異なるケースも見られると同時に、ある一つの王国で、王によって仏教を信奉したり、ヒンドゥー教を信奉したりといったケースもまた見られるのである。両者の間には、鋭い対立をも見て取ることができるが、同時に、シンクレティズムの存在も事実であり、「インド化」の理解を難しくしている。そこには当然、東南アジア自体の問題が存在するはずであるが、そのことの理解のためにも、インドにおける仏教とヒンドゥー教の関係が重要になってくる。教義的な問題と同時に、東インド、南インドなどで、仏教とヒンドゥー教が実際にどのような関係をもっていたのか、従来の研究ではその考察が十分に行われておらず、その必要性があらためて認識された。



【写真2】 カリマンタンで発見された5世紀のムーラヴァルマン王の刻文。ジャカルタのインドネシア国立博物館保存の石碑拓本を取ったところで、西部デカンのカダンバ様式文字の特徴がきれいに浮かび上がった。言語はサンスクリット語。

第三に、東南アジアへと文化を伝播させていったインド各地での歴史的背景、つまり、インドからの文化の「押し出し」の事情がかならずしも明らかになっていない点である。タミル地域からの伝播については、辛島が、タミル商人の活動と関連させてそれを説明しようとしてい

るが、例えば、アーンドラ地方からの伝播、これは仏像の様式などを通じて想定されるのであるが、それについての事情が現段階では明白になっておらず、カダンバ朝の下での西部デカン地方からの伝播についても（これは、インドネシアに残る刻文の書体からいいうる〔写真2〕）、同様にその歴史的事情が明白にされているとはいいがたい。

第四に、東南アジアへの文化伝播を、インドからの「押し出し」だけで説明しようとする 것과自体に無理があるかもしれないという反省である。つまり、ガンジス川流域のナーランダー僧院のような仏教団の学術・布教活動センターに、例えばスマトラのような東南アジアの地域から積極的コンタクトがなされたような事実（シュリーヴィジャヤのバーラプトラ王の寄進に言及する刻文が残る）を重視して、伝播を相方向的にとらえる視点が必要ではないかという点である。これは場合によっては、日本の遣唐使のようなことを考えれば、理解しやすい点であるかも知れない。

第五に、これもすでに記したように、スリランカの重要性の再認識が必要な点である。それは、スリランカというと、従来は上座部仏教だけに焦点が当てられてきて、それ自体は大変に重要であるのだが、もう少し大きく、スリランカ文化の中にインド的要素と東南アジア的要素の両方が見られることの意味を問う必要があるのではないかという点である。また、スリランカ文化の中に認められるインド的要素に、仏教のようないわば汎インド的なものと、生活文化に見られるケーララ（マラバール）的なものの両方があることも注目すべき点である。スリランカはインドと東南アジアとの関係を考える上で、重要なポイントとなるのであるが、われわれは、もう少し問題を整理して、「マラバール・スリランカ・東南アジア」ルートの存在などを想定して、よりフレキシブルに考えて行く必要があるというのが当面の結論である。

5. 今後の課題

以上が今年度の研究活動を通して浮かび上がってきた問題点であるが、すべてが大きな問題であるので、次年度にそれらの全体を追求して行くことはまず不可能であろう。各研究者が以上の諸点を十分に意識しつつ、その視点をそれぞれの個別研究の中に生かして行くしか道はないであろう。

辛島は、タミル商人ギルドのスリランカや東南アジアでの活動をさらに探求し、インド文化伝播の具体的状況を解明すると同時に、インド・スリランカ・東南アジアの関係を歴史的に考察する作業を行う予定である。前者と後者は、相互に関連しているが、後者、すなわち、インド・スリランカ・東南アジアの歴史的関係については、とくにチョーラ王朝期を中心とする時

期の状況を明らかにすることによって、汎インド的なものと地方的なものとの絡み合いをも考察することになっている。

山崎は、今年度に行った『ラーマーヤナ』における王権論の考察を発展させて、汎インド的なものが、地方文化の中に組み入れられて行く「構造」の問題に迫ることを目標にしている。そのためには、貨幣や刻文のような史料の検討も必要であり、また、できれば、プラーナ文献の検討をも行いたいと思っている。前者は刻文を取り上げることによって辛島の研究との接点、後者は伝承を問題にすることによって田辺の研究との接点を作りだすことが期待されている。

栗屋は、当面はケーララ（マラバル）のナンブーディリ・バラモンの社会変容の問題をさらに追求して行く予定であるが、それと同時に、カースト的結合関係、あるいは、親族組織、さらに、社会における女性の地位の問題などを取り上げて考察することによって、マラバル、スリランカ、東南アジアの比較を行うことをも考えている。すなわち、それによって「インド化」というものが実際には社会組織のどの面で起こるのか、別の言い方をすれば、東南アジアは「インド」文化のどのような点をうけ入れ、どのような点をうけ入れなかったのかを明らかにして行こうと考えている。

田辺は、平成8年度はずっとインドに滞在することになっており、それゆえ研究班の組織からは離れるが、現地（オリッサ）において、宗教的権威と政治権力の関係の問題を、民衆の存在を媒介として具体的に把握すべく、フィールド・ワークを続ける予定である。以上のような課題を各人が追求することによって、所期の目的を達成して行きたいと考えている。総じて、今年度の研究活動によって、問題点は明らかにされたと思うので、後は各人がその研究を推進し、その成果に基づいて、さらに新しい研究の進展を計って行くようにしたい。

6. 研究業績（平成7年度発表分）

辛島 昇

「仏教・ヒンドゥー教・イスラーム教」『世界史とは何か』（講座世界史1）東京大学出版会、pp.101-126, 1995.

"Nattavars in Tamilnadu during the Pandyan and Vijayanagar Periods," *History and Society in South India*, ed. Mizushima, T. and Yanagisawa, H., Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo, pp.14-21, 1996.

『南アジアの歴史と文化』放送大学教育振興会, 217p, 1996.

"Indian Commercial Activities in Ancient and Medieval Southeast Asia," *Proceedings of the*

Eighth International Conference-Seminar of Tamil Studies, Vol. I, Madras, 1996(Forthcoming).

山崎元一

「古代インドの部族貨幣(Trival Coins)について」『国学院大学紀要』34: 1-24, 1996.

「ラーマの王国 — 『ラーマヤナ』の王権論」『東方学会創立五十周年東方学論集』東方学会, 1996(刊行予定).

粟屋利江

「ナンブーディリ・バラモンの改革運動を考える」『東洋文化研究所紀要』128: 141-178, 1995.

「インド女性史研究の動向」『南アジア研究』7: 132-169, 1995.

"Situating the Malabar Tenancy Act 1930," *Local Agrarian Societies in Colonial India: Japanese Perspectives*, ed. Robb, P., Sugihara, K. and Yanagisawa, H., Manohar, Delhi/Curzon, London, 1996.